國學院大學学術情報リポジトリ

2023年度国際研究フォーラム「見られることで何が変わるのか--ツーリズムと宗教文化」報告書

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-05-21 キーワード (Ja): NDC8:161.3, NDC8:689 キーワード (En): 作成者: 國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001633

写真と社会風景：
『STAGE』『SINGERS & STAGES』『台湾綜芸団』を例に

沈　昭良
（華梵大学写真／ VR デザイン学科　教授）

台湾には、綜芸団、歌舞団、康楽隊、そして視覚映像メディア会社などの名で呼ばれるさまざまな演芸興行団体がある。客層と仕事の内容は重複しており、まとめて台湾独特の移動式興行団体と呼ぶことができる。彼らは、1970 年代前後から、歌やダンスなどのパフォーマンスを中心に、台湾社会の各種冠婚葬祭の場において活躍してきた。この写真集の被写体であるステージカーは、今でも現役で、台湾の庶民社会に生き続けている。上記のような興行団体の公演の場を提供し、多くの台湾民衆の集合記憶上の移動式「キャリアー」となっている。

あれは 2005 年末頃であったろうか。「台湾綜芸団」を主とする撮影プロジェクトに集中して取り組むために、ちょうどフィールドワークを始めた頃だった。台湾の総合演芸団が公演を行う「キャリアー」としてのステージカーに遭遇することが、たびたびあった。静寂の農村で、ナイトマーケットの喧噪の傍らで、辺境の漁村で、道ばたの雑踏の中で、はたまた寺のざわめく広間の前で。まるで巨大な台湾版トランスフォーマーのようなこのステージカーに、惹かれる自分がいた。描かれた台湾らしい色彩とトーテム、それらが結びつける生産の知恵と発想、そこに表現された庶民の価値観と記憶、地方精神、地方気質がもたらす影響の深さと広がり、そこから拡張される文化の厚みと広がり。そういったものに、絶え間なく動かされ、私はだんだんと〈STAGE〉（ステージカー）を、独立したもうひとつの作品テーマとして発展させたいと考えるようになった。

初期に興行団が使用していた舞台には、今でも使われているテントと舞台を組み合わせたもののほか、トラックを改造して音響設備を搭載した簡易式の電子オルガン車もあった。最近では時代の変化に合わせ、また経営者や観衆がより良いライティングや音響設備を望んでいることもあって、電子花車（訳注：電飾などの装飾が付いた舞台付きのトラック）や、折りたたみ式の油圧式移動ステージカーなどへと発展してきている。こういった類いのステージカーの開発や製造、メンテナンスに関わっている工場は、最高レベルの知識と技術を具える必要がある。また様々な種類の専門的なラ

イセンスをそれぞれ申請しなくてはならない。そういったことから、台湾全体でも業界で知られているのは、わずかに、虎尾吉大や北斗長億、嘉義嘉易といったメーカーのみである。ステージカーの発展の歴史を見ると、一見簡単なこれらの研究開発のプロセスが、実際には、材料や動力、機械、電機、工業デザインなど、多くの分野にわたることが分かる。折り畳み収納式も、これら上記のそれぞれの科学が精進して練り上げたものと言えるだろう。初期の純手動の発想から、中期の有線操作へ、そして現在の、数分で舞台装置が開く無線操作技術の完成へ、と発展してきたのである。

その中でも、ステージカーの視覚主体の舞台デザインは、初期には、線描や図形、色の塊などで簡単に蛍光灯を補っただけのシンプルな方法であったのが、時代の流行や、ほとばしる想像力に従って、東西の内容と形式をカバーするようになった。例えば帆船や竜、あずまや、蝶、馬車、シドニーのオペラハウス、ホワイトハウス、ヨーロッパ式の城塞、自由の女神、スペースシャトル、観覧車、子どもに人気のハローキティやピカチュウなどの具象的トーテムを、ネオン管と組み合わせ、スプレーペインティングで舞台上に描いたのである。このごろの舞台デザインはまた新しい流行に乗って、抽象的トーテムという方向に向かっており、その視覚表現の主体も、新しく鮮やかな技術である LED ライトの光へと変わってきている。ステージカーの開発と発展は、現在進行中で絶え間なく挫折と刷新を繰り返しながら、安定の方向へと向かい、成熟してきていると言ってよい。

ステージカーの歴史と文脈を振り返ってみると、清代の「蜈蚣閣」や日本統治時期の「芸閣」など、女性が籠に担がれて街を行き来する民衆の活動に、その源流を求めることができる。ただし、移動式ステージカーの進化にのみ注目し、関連の研究報告や筆者のフィールドワークの結果も合わせて考えるならば、以下のように分類することができる。葬儀専門の女性コーラスを電子オルガンと結びつけ、素朴な色の花で周りに装飾を施した花カゴ車（1975 年）、葬儀がもたらす包み隠されたような印象を避けるために、その花カゴ車を簡易なネオン管やプラスチックの造花で飾った電子オルガン車（1977-78 年）、目の覚めるように美しい装飾が機動性を高めると同時に舞台の形式と音響やライティングの効果を備えるようになった電子花車（1980 年代から現在まで）。そして、電子花車が葬儀と慶事を兼用していることと効果的に区別するために、より効率が良くプロらしい舞台効果を研究開発してできた油圧式移動ステージカー（1990 年代初期から現在まで）がある。これら四種のステージカーの、年代や異なる需要に基づいた鍵となる変化は、お互いに密接に結びついている。

台湾にはいったい何台のステージカーがあるのだろうか。精確な統計は無いが、実際に営業しているのはおそらく 600 台に上るのではないかと思われる。雲林や嘉義、

台南地区に特に多い。これらの地区には寺が多く、寺と結びついて頻繁に祭りが行われるからである。住民はみな敬虔かつ熱心で、神への感謝をあらわす宗教活動となると、一生懸命である。慶事の場合は、戸外にテーブルを並べて客をもてなす習慣（辦桌）があることとも、この地区でステージカーが特に発展したことと密接な関わりがあるだろう。時代の変化に伴って、ステージカーの利用方法は、しだいに街頭での活動や選挙運動にまで広がり、多様性を見せはじめている。料金は主に時間で計算し、レートは場所や車の大きさや使用年数によって異なる。借り主は一般民衆や企業や商店、或いは同業者同士で調整するようになっている。ステージカーの主は、顧客の要望に応えなくてはならないだけではない。指定された時間に指定された場所で舞台を広げ、約束の時間内に活動を行う。事前に舞台の準備を済ませ、演目が終わると片付け、公演中はずっと音響やライトの操作を受け持つことになる。

ステージカー上の公演内容は、初期には歌って踊るパフォーマンスが主なものであった。その頃の芸人たちの衣装やスタイルは、どちらかというと、屋内でのショーの華麗な服装と似通っていた。近年では、セパレート式の衣装が主流であり、中にビキニを着るスタイルが一般的となっている。演芸興行団の公演内容も、派手で顧客のニーズを満足させるものであり、絶えず新しい演目が加わる。タレントや歌手による歌と踊りのほか、借り主の予算に合わせてこれに、ポールダンスやアクロバット、手品、民俗芸能、ボディビルショー、芸人が異性に扮してのショーや、ビッグバンドによる演奏などが加わる。

芸人には、プロもいれば、セミプロもいる。芸に身を投じる理由も、それぞれだ。一般的には、家計を助けるためではなく、練習するうちに芸に秀でるようになったとか、演じるのが好きだとかいうような理由が多い。あるいは家族が長らく関連の仕事をしているために、この世界に足を踏み入れたという者もいる。芸人たちの仕事のやり方には、時間刻みで多くの会場を回る形が多く、約束した時間内に、近くの村々に舞台を出しているいくつかのステージカーを、順番に回る。ぎりぎりになって頼まれても二つ返事でさっと動けること、次々に仕事をこなせることが望まれる。

芸人には歌手が多く、台湾各地にあまねく分布している。私のフィールドワークからわかったのは、プロの歌手以外にも、学生や英語教師、銀行職員などが、少なからず活動していることである。彼らは仕事が休みの日に、兼職という形で、ステージに立つ。旅回りの歌手を至近距離で観察していると、彼らのような芸人が、きらびやかな外見の裏で、実は非常に平凡で素朴な素顔を持っていることに、驚きを禁じ得ない。長らく報道の影響で形作られてきた一面的な理解やネガティブな描写とくらべると、

その落差はきわめて大きい。フリーの歌手の場合、やはり若い女性であるほうが、業者に人気がある。年上の歌手は、通常、司会者や経営者に転身することはなく、結婚後、この仕事を辞めて、別の仕事を探すこととなる。

この数年、ステージカーが舞台を出す町や村の土地に降り立つたびに、レンズの前の幻影的な現実だけではなく、いつも私の心を動かすことがもうひとつあった。それは、おそらく自分は、〈STAGE〉（ステージカー）シリーズの撮影のためでなければ、この場所には来ていなかったであろうし、また、訪問のプロセスの中で、都会とは違う田舎の人たちの気質について知ることもなかっただろう、ということである。現場が辺鄙な郊外の野原にあったり、また夕方の暗くなりかけた色のせいで道が分かりにくかったりして、何度もあちこち探しまわったこともある。挫折感を味わいながら、夕暮れの中で水田に映り込んだ景色を頼りに進むしかなくなり、曲がりくねった村の間の小道を、焦りつつ、急いで駆け抜けたこともあった。あれから何年も経ったいま、出かけた場所や、撮影地点の移動ルートについては、はっきりとは思い出せない。ただ、鳳山の道路傍であろうが、台中の工場であろうが、新竹の寺の祭りであろうが、通霄の港周辺であろうが、苑裡の田圃であろうが、虎尾の家々のあいだにめぐらされた小道であろうが、嘉義の家々の庭であろうが、台北の野菜市場であろうが、富里の山林であろうが、どんな現場においてもそれらの幻影の中に静寂が漂っていたさまは、今でも昨日のことのように憶えている。

〈STAGE〉（ステージカー）シリーズを通して、視覚芸術の制作上でのドキュメンタリー写真の新しい表現を模索し、同時に台湾における現代写真の制作というものを体現したいという思いがあった。過去の、さまざまな抽象概念や、複合メディア、デジタル合成技術に焦点を合わせた表現に、疲労感を感じてもいた。そんなわけで、私は次第に、大型カメラを使うようになった。直接カメラに収める方法を取ることで、その瞬間の現実の文化社会の景況に対し、演繹的に深度を増すような作品を制作しようと考えたのだ。被写体の持つ条件と特質について考えをめぐらし、同時にステージカーと写実的環境とのあいだに生じる、色とトーテム、照明と全体の雰囲気が結びついてそこに蔓延する超現実的状態、そして現場を覆っている幻想的でにぎやかな様子を視覚的に忠実に再現するために、ステージカーの撮影のタイミングを一律に日没の前後に設定し、4×5判のカラーポジフィルムで撮影を行ったのである。

〈STAGE〉（ステージカー）作品シリーズのほとんどが、誰もいないステージと周りの環境を配置した表現形式を取っている。これは、ステージカーの存在が、庶民社会の中で突出した存在である現状と、多様なそれぞれの現実の場所と場所とのあいだ

に、はっきりと明示できない対比があることを示している。また、視覚表現と様式の上で、伝統的な写実ドキュメンタリーの様式とは異なる、環境肖像との融合に向かうような、視覚的にグループ化し、タイプ別に分類する現代的表現方法を取っている。しかし、〈STAGE〉（ステージカー）シリーズの実景の撮影は、主観と客観の要素が実にごちゃごちゃと入り乱れ、その実務の難易度は、私の何年にもわたるフィールドワークと撮影実務の経験においても、一二を争うものであった。絶え間なく現場に通う必要があるだけではない。台湾全域に分布するステージカーをたずねるために、業者に連絡してコーディネートを行い、適当な撮影場所をロケハンして歩き、同時に、公演内容のタイプや、撮影地点、季節や気候、日没時間、住民の観賞習慣や生活リズムなどを斟酌しなければならない。そうやって、2006 年から 2023 年までのあいだに、おおよそ 130 部前後の撮影を行ったのである。

今回の報告は、2006 年から 2016 年にかけて撮影した『STAGE』、『Singers & Stages』、『台湾綜芸団』の三つの作品シリーズから、美学表現、歴史、文化、宗教などとの繋がりにもとづいて写真を選び、全体像が見えるように編集したものである。この産業の独特さ、そこに含まれる豊かな文化的情報、駆け巡るアイデア、まばゆく華麗なトーテム……。これらは大衆に働きかけ、独特な産業であり娯楽文化であるものに、時間的な広がりを持たせ、かつ空間的な、つまり、縦、横、平面、及び立体的な枠組みを織り込み、人々の想像を促している。撮影に際しては、ほとんど伝統的とも言える直接的な撮影方法を用いることによって現代的な芸術語彙を混ぜ込み、台湾のいまを伝える社会文化の景況に焦点を合わせて、これを視覚的に描写することを試みた。

写真集≪ *SINGERS & STAGES* ≫（2013）表紙

SINGERS & STAGES 系列 - 高雅 | SINGER Kao Ya、台南 台湾 | Tainan Country,Taiwan、2008 年筆者撮影

SINGERS & STAGES 系列 - STAGE#69　雲林 台湾 | Yunlin Country,Taiwan、2008 年筆者撮影

写真集≪ *STAGE 攝影集*≫（2011）表紙

STAGE#14　Lightjet C Print　苗栗 台湾｜ Miaoli Country,Taiwan、2010 年筆者撮影

STAGE#68　Lightjet C Print　台南 台湾｜ Tainan Country,Tiwan、2008 年筆者撮影

STAGE#97　Lightjet C Print　台中 台湾｜ Taichung Country,Taiwan、2011 年筆者撮影

STAGE#99　Lightjet C Print　嘉義 台湾｜ Chiayi Country,Taiwan、2009 年筆者撮影

STAGE#120

写真集≪*台灣綜藝團 攝影集*≫（2016）表紙

新北 台湾｜ New Taipei City,Taiwan、2006 年筆者撮影

台北 台湾｜ Taipei,Taiwan、2005 年筆者撮影

新北 台湾｜ New Taipei City,Taiwan、2010 年筆者撮影

雲林 台湾｜ Yunlin Taiwan、2013 年筆者撮影

嘉義 台湾｜ Jiayi,Taiwan、2008 年筆者撮影

嘉義 台湾｜ Jiayi,Taiwan、2008 年筆者撮影

筆者（沈昭良（シン・ショウリョウ）氏）写真